

『緊縛に愛して』

著：甲山恋子

ill：北沢きょう

カチャッと音がした奥のキッチンに顔を向けると、人(ひと)懐(なつ)っこい優しい笑みを浮かべた若い男が現れた。

「起きた？ あんまりぐっすり寝込んでたから、起こすのも悪いかなって思って」

彼は自分が飲むために淹(い)れたんだらうコーヒーのカップを俺の前のテーブルに置くと、またキッチンに戻っていった。

ヤツが嘉門？

俺よりノッポなうえに適度に浅黒くガッシリしていて、読者モデルにお願いしたいくらいの爽やか系ハンサム好青年じゃないか。さらりとした長めの髪が芸術系って雰囲気醸(かも)し出し、この見た目だけだと縛り師とかいう怪(あや)しげなイメージと結びつかない。

彼はコーヒーカップを手にキッチンから戻ると、寝(ね)惚(ぼ)け眼(まなこ)の俺の前にあるソファーに座った。

「初めまして、嘉門了(りょう)です。宮本英治さんですよ？」

嘉門は名刺をテーブルに置くと、コーヒーを一口飲んだ。彼の名刺は、名前と連絡先しか印刷されていないシンプルさだ。

当たり前か。縛り師なんて肩書き印刷して渡しているほうが、よっぽど異常だよな。

それより、この嘉門って人、見た感じ若そうだけど歳は幾つくらいなんだ？

山崎が急いで出ていってしまい、俺は彼について詳(くわ)しいことを何も聞いていない。年齢二十八歳の俺よりは落ち着いた雰囲気や物腰だ。それから判断すると俺と同じ…、いや、一つか二つ上かもしれないな。

「いらっしゃってることにも気づかず、申し訳ありません。お渡しするのが遅れまして」

俺もポケットの名刺入れから名刺を取り出すと、嘉門に差し出した。すると嘉門は名刺ごと俺の手を握り、まるで貴婦人にするように手の甲に軽くキスをする。

「あなたみたいな美人と、お仕事ご一緒させていただけるなんて、光栄だな」

「はあー？」

男相手に何わけの分からんこと、ヤツたりホザイたりしてんだよ、コイツ。

ここはホストクラブじゃねえんだ！

こんなおかしいヤツとしばらく一緒に仕事をするのか？

まともに相手にしたら図に乗るだけだ。今日は顔合わせと予定確認だけしてもらい、さっさと帰っていただく。

俺は慌(あわ)てて手を嘉門の掌(てのひら)から引き抜き、気を取り直して、山崎が置いていった取材スケジュール表をテーブルに出した。

「……嘉門さん、まずはあなたが組んでくださった取材スケジュールの確認をしますね。最初は、最先端ブティックホテル探検ということで、渋(しぶ)谷(や)のホテル、ノーマジーンで経営者のインタビューと写真撮影ですよ。撮影する部屋は、嘉門さん一押しの二〇一号室ということですが」

「そうそう。この部屋の内装がサドマゾっぽい造りで、三角椅子や鎖(くさり)付きの岩(いわ)牢(ろう)なんてインテリアが素(す)敵(てき)なんですよ。だからといって、おどろおどろしくなく適度におしゃれでね。見たらあなたも気に入ると思いますよ」

「勝手に決めつけないでください」

「英治さんこそ、決めつけなくてもっと頭を柔らかくしようよ。せっかく取材するわけだから、ついでにベッドや室内施設の使い勝手を確かめない？ 絶対、プライベートで使いたくなると思うんだ」

何なんだよ、コイツは。

いちいちカンに障(さわ)る言い方しやがるな。俺はただの取材同行者だ。勝手に teme の変態仲間のメンバーに加えるな。

「ああ、そうですか。で、次は…」

無視してその後の予定確認を続けていると、嘉門が口を挟む。

「ご確認中失礼ですが、明後日(あさって)、英治さん、お仕事が入ってます？」

胸元のポケットから手帳を出して確認した。

「明後日？ ……別に予定は入っていませんが。スケジュールの変更ですか？」

「今後の仕事のことで、あなたともっと詳しく打ち合わせしたいんですが」

今しているだろうが！

「確認が大(おお)雑(ざつ)把(ぱ)すぎましたか？ 細かいことは現場に行く時点で充分だと思いますが。足りないようでしたら、より詳しくご協議させていただきますよ。今、ここで」

「……ん、ここよりもっと色気のある場所をお願いしたいな」

会話が噛み合わね。

爽やか路線を気取っていても、中身は危ない縛り師だ。

一番ムカつくのは、男の俺を真っ正面から口説いてくることだ。こんなマニア雑誌の編集をやっているから、簡単にその気になるとでも思っているのか？

おまけに、馴(な)れ馴(な)れしく『英治さん』と名前を連発しやがって。

俺が日程表に目を落とし黙(だま)ったままでいると、クスクスと嘉門が笑いだした。

「僕、あなたをデートに誘っているんだけど。山崎さんが英治さんのこと、かなりの遊び人だって噂(うわさ)してたから、てっきり分かってもらってたんだと思ったのにな…」

山崎のオヤジ、コイツに余計なことを喋りやがって。

俺が遊んでいたのは女だけだ。男じゃない！

っていうか、お前のほうこそ、俺が拒絶オーラ出しているのを分かれよ。

「……俺はホモじゃない」

「奇(き)遇(ぐう)だね。僕もそう。僕は素敵(すてき)な人がいたら、迷わずデートに誘う主義なんだ。魅力(めいり)ってのは、性別(せいべつ)に関係ないしね」

お前の恋愛観(こひのらん)ってか、性癖(せいせき)なんて興味(きょうみ)ね一よ。

あー、苛(いら)々(いら)する。

仕事(しごと)だけじゃなくて、頭(かぶ)の中(なか)もかなり危(あぶ)ないのか？

「で、明後日(あ)いてるんだよね、英治さん」

「……空(あ)いてません」

「嘘(うそ)つき。今(いま)ないって言ったじゃない」

俺はペンで明後日(あさって)の箇所(箇所)にバツ(×)を書き入れた。

「今、校正の締め切りがあるのを思い出しました。残念ですが」  
「冷たいな、英治さん」  
「それと、英治さんはやめてもらえませんか」  
「じゃ、英治って呼んでいいんだね。嬉しいな、僕の場合は了って呼んでいいから」  
「違うだろーが！」  
「コイツ、絶対俺をからかっている。  
もう嫌だ。こんな会社にいるから、ヤローに口説かれるなんて目に遭うんだ。  
明日にでも人材バンクの会社に行って、転職登録するしかない。  
俺は無言で嘉門を睨(にら)み、「話は終わった。さっさと帰れ」と心で毒(どく)突(づ)いた。」  
「そんなキツイ目を僕に向けないでほしいな、英治。凄く弱いんだ、そういう表情って…。下半身直撃って感じで、ソソル…」  
「ガタッと急に嘉門が立ち上がったので、俺はビクッと身体を震わせた。  
嘉門は初対面の時と同じ爽やかな笑顔で俺に近づくと、ソファの隣に覆い被さるように座ってきた。俺が逃げようと身体を退(ひ)いても、いつのまにか腰に回されていた嘉門の腕がそうはさせてくれない。」  
「なっ…何だ、お前！」  
「スマートな見た目と違い、かなり強い腕の力で俺を抱き込んでくる嘉門。顔を引きつけ、バタバタとその腕の中で暴れる俺を、面白そうにヤツが見下ろしている。  
「いい艶(つや)しているね、あなたの肌。縄(なわ)が食い込んだら、どんなに美しいか…」」  
「爽やかさが影を潜め、嘉門の目がトロンと俺を見つめる。  
「ねえ、これも何かの縁だし。僕に縛られてみない？ その前に、身体の弾力確かめさせてほしいな」  
「ひええーっ！」  
「人生最大の貞(てい)操(そう)の危機に、俺は情けない悲鳴を上げて腕を突っ張った。  
「けっ…警察を呼ぶぞ！」  
「何？ いくら僕でも、ここであなたをヤルほど鬼(き)畜(ちく)入っていないから安心してよ。本当は、このまま飲みに誘って英治を口説き落としたいところなんだけど、残念なことに、まだ仕事が残っていてね」  
「たっ…助かった。  
「そんなに露(ろ)骨(こつ)にホッとした顔されると、ショックだな」  
「言葉と違い、大して傷ついていないようだ。嘉門は指先で俺の頬(ほほ)を撫(な)で上げ、クスッと笑った。」

本文 p22～29 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>